

民俗資料館だより

第2号 1995. 3. 20
発行 加茂市民俗資料館
住所 加茂市大字加茂229-1
電話 0256-52-0089

民俗資料館の新たな発展を期して

加茂市民俗資料館長 田澤 弘一

加茂市民俗資料館は、加茂山公園内の旧図書館の建物に移転し、平成6年11月17日に新たな開館の一步を踏み出しました。これは、従前の場所に下条コミュニティセンターが新設されるに伴い移転したものです。民俗資料館の使命は、私たちの祖先が脈々と築き上げた、歴史と伝統の中で生まれた住民の遺産を、多くの方からご覧頂くと共に、適正な保存のもとで後世の人たちに受け継ぐことだと考えます。

収蔵品は約8,000点あり、そのうち関係各位のご協力も得て、現在約1,200点を常設展示しております。展示品は、市内の遺跡からの出土品、加茂の祭りや産業、民俗などに関する貴重な物ばかりで教材としても最適です。新年度は土曜、日曜日の一部開館も予定しており、多くの皆様方のご来館をお待ちいたしております。



創業の難

加茂市文化財調査審議会委員長 古川 信三

平成6年11月17日、加茂市民俗資料館は下条中村から、加茂宮山の旧図書館に移転オープンした。いわば、民俗資料館の再出発にあたり、創立の当初に思いを馳せてみたい。

昭和49年3月29日に制定された「加茂市民俗資料館条例」により、資料館は同年4月1日に設置されることになった。建物は廃校になった下条中学校の古い校舎を利用して、4箇月後の8月20日に開館の運びとなった。創立業務の一切を荷なわれた初代館長横山旭三郎先生の苦心たるや、容易でないものであったと推測に難くない。

横山先生は明治42年、佐渡赤泊村石塚家に出生、高田師範学校を経て昭和4年に加茂小学校に赴任、以来、加茂南小学校、加茂中学校に教鞭をとり、昭和27年鹿峠村中浦小学校長に転出、

昭和31年に教職を辞す。直ちに加茂市教育委員会に勤務し、加茂市公民館長、図書館長、民俗資料館長などを歴任せらる。その間、加茂市史編纂委員、文化財調査審議委員、その他の要職に就き活躍中、平成2年9月13日に逝去された。81年の生涯中、加茂在住60余年を数え、加茂の万般にわたり加茂生まれより詳しく、知悉しておられたのである。加茂市民俗資料館は横山先生にして始めて創設し得たとするも、過言であるまいと信じている。

「創業の難」という言葉がある。辞書の解説によれば、『十八史略』の『唐書』が出典という。唐の二代目の太宗が「事業を始めることと、成った事業を守り続けることでは、どちらがむづかしいか」と待臣に問うた。創業の苦心を経験した尚書房玄齡は「創業は難なり」といい、守りの任にあたった魏徴は「守成は難なり」と答えたという。

立場によって、それぞれの思いはことなるだろうが、なんといっても無から有を生ずる「創業」ほど難しいものはあるまい。初代館長横山旭三郎先生の「創業の難」を讃えたい。

かつて、下条時代の民俗資料館の玄関に大書して掲げられていた「本館の提言」は、横山先生の提言である。ここに識して先生を偲ぶすがとしたい。

「文化財は一朝にして生れたものでない。私たちの祖先が長い歳月をかけて、その英知と技能をかたむけて創造し発展させた所産である。しかも民俗資料の大部分は特定の人の創造ではなく、一般庶民の生活の中から生まれた文化財である。そのために私たちを育ててくれた自然と共に郷土の心のよりどころである。やがてこの文化財から次の時代のよりよい生活用具が創造されていくのである。それ故に私たちは、この文化財を失うことなく子孫に引きつぐべき責務がある」

ちなみに、この提言の書は下条小学校におられた堀川英子先生によるという。

I. 展示室の紹介

移転開館した民俗資料館は加茂山公園の一角に位置し、JR加茂駅から徒歩7分という至近距離にあり、身近かな資料館として市民に親しまれている。建物の外観は旧図書館当時のままであるが、内部は資料館の機能を十分に果たせるよう大改装を行い、照明を増やすなどして一新された。展示品をじっくりと見ていただくために休憩室を設けてある。

1階は、加茂市の祭り、歴史、古文書などの資料を展示した第1室と考古資料を展示してある第2室からなっている。

2階は、建具製造工具、木工特産物などの資料を展示している第3室と復元した昔の農家の居間・商家の帳場、漢方薬製薬器具、はた織機、紙漉き用具などの資料を展示している第4室からなっている。展示品の中に、加茂市指定の文化財が数多く含まれている。



灯ろうと加茂祭の御神幸（紙人形）

Ⅱ. 平成6年度のあゆみ

1. 入館者数

	平成6年4月～平成7年2月		
	市 内	市 外	計
大 人	574	216	790
小中学生	598	151	749
計	1,172	367	1,539

移転準備などにより、休館期間が約3か月あったが、入館者数は昨年同時期に比べ311名増えている。特に開館した11月は268名の多きを数えている。

2. 資料の収集

本年度は8名の方から11件15点のご寄贈を賜った。お礼申し上げ紹介させていただく。

- ・土釜 2点 ・火熾し 2点 ・シュロボウシ 1点
- ・加茂竊前掛け 1点 ・足袋(女性用) 1点 ・長靴下(女性用) 1点
- ・橋の銘板(葵橋) 2点 ・ガス自動炊飯器(1.8ℓ) 1点
- ・紙漉き用具、なで 1点 ・須恵器破片(花立遺跡より) 2点
- ・写真(大賀ハス)・4つ切サイズ・額付 1点

<寄贈者ご芳名(五十音順、敬称略)>

小柳 恵美 近藤 テイ 坂上祐三郎 武石 松雄
坪谷 清作 古川 信三 古川 洸 諸橋 ヨリ

3. 平成6年遺跡発掘調査の概要

平成6年に市内で行われた発掘調査の概要について報告する。

① 加茂市役所遺跡

所 在 地 加茂市松坂町268番地ほか

調 査 面 積 約50㎡

調 査 期 間 平成6年3月11日～3月14日

調 査 原 因 旧市役所庁舎解体撤去工事など

調査の概要 本遺跡は、新津・村松丘陵の一角を占める加茂山の麓に位置する。昭和30年に市庁舎地下室建設中に、地表下約4mの地層から縄文土器が出土したことにより、所在が明らかになった。八百枝茂氏らの努力により、縄文土器約150点などが収集された。これらの土器は、縄文中期前葉～後期前葉(約5,000～4,000年前)に比定される。他にも、石鏃、土師器、中世陶器数点などが、収集された。

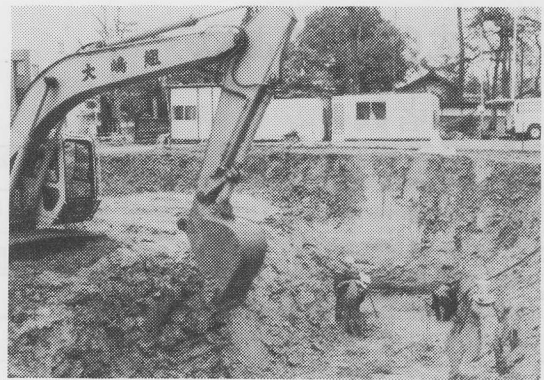
今回の調査では、僅かの土器片が出土したのみで、遺跡の性格などは不明である。しかし、縄文中期前葉～中世に及ぶ長期間に、断続的な



遺跡位置図 S=1/10,000

がら、何らかの活動が見られたことは事実である。特に、縄文期における低地利用の在り方を考える上で重要である。また、古代・中世においても、青海神社境内地一帯にひろがる青海神社遺跡との関係が問題となろう。

なお、昭和30年出土資料と今回の発掘調査の結果をあわせ、調査報告書を本年3月に刊行する予定である。



遺跡発掘調査風景写真

② 釜淵遺跡

所在地 加茂市新栄町 1917-1、1918-1 ほか

調査面積 約 3,150 m²、(上層 1,800 m²、下層 1,350 m²)

調査期間 平成6年5月6日～6月9日

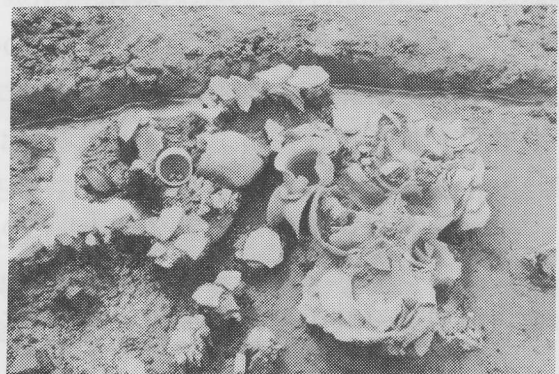
調査原因 民間開発

調査の概要 本遺跡は、加茂川左岸の沖積地上に立地し、加茂市役所庁舎南側の道路をはさんだ前面一帯に展開する。本遺跡は、昭和59年に県道加茂・巻線沿いの下水道工事中に土師器などが発見されたことから所在が明らかになった。

遺跡地内一帯には盛土が約2m程存在し、遺物包含層を厚く覆っていた。遺物包含層は約1m程の間層をはさみ、2層確認された。上層面においては古墳時代後期～中・近世の遺構・遺物が見られ、特に古墳時代後期(約1,400年前)の土師器が多量に検出された。下層面では古墳時代前期(約1,600年前)の遺構・遺物が確認された。遺構は、上層・下層ともに土坑・柱穴・土器溜まりなどがあり、特に下層では旧河川跡沿いに点在している。遺物は、上層・下層あわせパンケース54箱にものぼった。今後の整理作業を通して、遺跡の性格などを考えていきたい。いずれにしろ、千刈遺跡出土品などとあわせ考えると、加茂市において古墳時代に大きな変革があったことが予想される。また、文政11年(1828)に発生した三条地震によると思われる液状化現象に伴う噴砂も確認され、注目される。本遺跡の発掘調査は、期間・予算の限りもあり、十分な調査が行えなかったことは残念であったが、当市にとって、極めて重要な遺跡と考えられ、今後も様々な面から検討を加えていきたい。



遺跡位置図 S = 1 / 10,000



古墳時代前期遺物出土状況写真

③ 上條館跡

所在地 加茂市上条 671-6、714-4 ほか

調査面積 約 340 m²

調査期間 平成6年7月4日～7月5日（第1次）、10月19日～11月1日（第2次）

調査原因 道路築造

調査の概要 本遺跡は、北側の丘陵に存する上條城跡眼下の沖積地上に位置する。上條城跡と関係した館跡と推定されていたが、今回の数次にわたる確認調査の結果からは、館跡を裏付ける遺構・遺物は検出されなかった。検出できた遺構は、性格不明の木組み遺構のみで、遺物も珠州焼2点、漆器1点、箸状木製品数点と希薄であった。中世の遺跡であることには、間違いのないところであるが、上記の結果から、遺跡の名称変更なども含め、検討の余地がある。

館跡は、更生図の検討などから、上條城跡北麓の字館ノ腰地内が有力視されている。



遺跡位置図 S = 1 / 10,000



木組み遺構検出状況写真

4. レファレンス・サービス（民俗資料館への問い合わせ）

加茂市の歴史に関することや本館に所蔵している資料などについて、県内外からいろいろな問い合わせがある。本年度は20件（来館11、郵便6、電話3）であった。その中で県外からのものが半数の10件で、直接来館された方が4名おられる。その研究一途な姿勢に頭がさがる思いであった。

問い合わせに対しては、可能なかぎり調査をしてお答えしている。

県外からの問い合わせの主な内容は次のようなものである。

- ・加茂の歴史と産業について聞かせてほしい。
- ・加茂市史の内容について知りたい。
- ・加茂市及び周辺から出土した縄文土器とそれにかかわる資料を見せてほしい。
- ・水源池遺跡からの出土品とそれにかかわる資料を見せてほしい。
- ・「小柳家文書」についての資料を送ってほしい。
- ・岩野にあるといわれる、「伝、新田義宗一族の墓」の所在を知りたい。
- ・「新田義宗公戦死の伝説」についての資料を送ってほしい。
- ・廃寺になった、「胎蔵寺」について資料を見せてほしい。
- ・祭礼日に御神輿や山車が出る神社名、祭礼日などについて知らせてほしい。
- ・「俳人、小林一茶」に関する資料とその所在を教えてほしい。

5. 館外行事

① 古文書講座

「古文書を読んで加茂の歴史を知りたい。」という受講者の前向きな姿勢と、わかりやすくしかも真剣に解説される講師の意気込みとが一体となり、充実した講座であった。

- ・開催日 6月25日、7月16日、8月6日、8月20日、9月10日 計 5回
- ・会場 加茂市公民館 第一研修室（時間 午後7時～9時）
- ・講師 加茂市文化財調査審議会委員 関 正平氏、 長谷川昭一氏
- ・受講者 33名
- ・内容
 - ・寛文6年～享保5年の永代覚書帳
 - ・紙一件之願書
 - ・元禄3年賀茂町裏家者共新町屋敷奉願面付帳
 - ・差上申御請書一札之事
 - ・差上申済口証文之事
 - ・市行司之儀御尋有候付

上記古文書について解説し、当時の状況やできごとなどについて解説された。

② 歴史講演会

講師は、長年にわたって下条から消えた「長福寺」について調査研究され、多くの資料を収集し、県外へも直接出向いて新史料の発見に努められた。本講演会は、豊富な資料と写真を用意され、新史料の紹介とともに長福寺の実像を明らかにされた。

- ・開催日 11月13日（日曜日）
- ・時間 午後2時～4時30分
- ・会場 加茂市公民館 第一研修室
- ・演題 中世の寺 長福寺について
- ・講師 加茂市文化財調査審議会委員
関 正平氏
- ・参加者 36名
- ・内容



下条字長福寺にあった寺、「長福寺」は14世紀の南北朝時代に創建され、少なくとも、240年以上は下条に存在した。長福寺を開山したのは長智上人であり、越後国守護上杉憲顕の越後進出に随伴して青海庄に入り、真言宗長福寺を開山し寺基を確立したと考えられる。

慶長3（1598）年の上杉家の会津・米沢への国替え時及び米沢城で、越後国賀茂の長福寺住職巖海法印が大般若波羅密陀經（600巻）を国土安穩、除災招福のために3回真經したことを記した史料が残っており、上杉大名家における長福寺の地位がうかがわれる。

元禄2（1689）年以降とされる米沢藩の「領内寺社帳」に記されている「本寺根来迎接院長福寺」こそが下条の長福寺を継承した寺とみられる。しかし、明治4年、法音寺が上杉家菩提寺として上杉家の御廟所の前に移転してきた時に、そこにあった長福寺が廃寺になったといわれる。今、下条の長福寺跡からは往時を物語る遺物が多く出土している。

貴重なお話が沢山あったが紙数の関係で割愛する。

Ⅲ. 加茂市文化財（平成6年度指定）

加茂市教育委員会は、西川新次先生（県文化財保護審議会委員）による「仏像調査報告書」をふまえて、平成6年12月13日に仏像（彫刻）3件4軀を加茂市文化財に指定した。

1. 木造 元三大師座像 1 軀

（若宮町、雙壁寺に安置されている。）



- ・像高 91.5 cm
（角を含む）
- ・面幅 18.7 cm
- ・膝張 85.6 cm
- ・玉眼嵌入
- ・ヒノキ材
- ・寄木造
- ・彩色

頭上に二角を生やし、目を見張り、口を開いてやや右上を仰ぎ、眉・口辺・顎に銅線で眉毛やひげを表わしている。すさまじい表情をもつ像で、胸をあらわにして肋骨を表わし、左膝を立てて坐わり、右手に剣を構える。

特異な形相をもつ一作として注目される。

製作年代は、鎌倉時代後期である。

2. 木造 阿弥陀如来立像 1 軀

（八幡、西光寺に安置されている。）



- ・像高 113.2 cm
- ・台座全高 39.0 cm
- ・面幅 12.2 cm
- ・頂～顎 20.0 cm
- ・玉眼嵌入
- ・ヒノキ材
- ・寄木造
- ・漆箔

鎌倉時代前期以降、造立が盛んとなった来迎印を結ぶ阿弥陀如来立像で、通常よくみられる三尺像より大型なのが珍しい。表現に誇張がなく、彫法や肉付けもおだやかである。国指定文化財である三条・乗蓮寺の木造阿弥陀如来立像と製作年代が近いのが注目される。

製作年代は、鎌倉時代後期である。

3. 木造 二天王立像 2 軀（若宮町、雙壁寺に安置されている。）

持国天または増長天

多聞天

- ・像高 84.7 cm
（頂宝珠飾を除く）
- ・全高 93.0 cm
（邪鬼を含む）
- ・邪鬼正面の幅 50 cm
- ・玉眼嵌入
- ・ヒノキ材 ・割矧造
- ・彩色



- ・像高 85.0 cm
（頂宝珠飾を除く）
- ・全高 94.3 cm
（邪鬼を含む）
- ・邪鬼正面の幅 49 cm
- ・玉眼嵌入
- ・ヒノキ材 ・割矧造
- ・彩色



忿怒の表情や動きのある姿態が写實的に、しかも簡潔な彫りで表わされており、安定感がある。その表情は親しみやすく、動きもおだやかである。

県下にのこる同時期天部形像の注目すべき一作である。

製作年代は、鎌倉時代後期である。

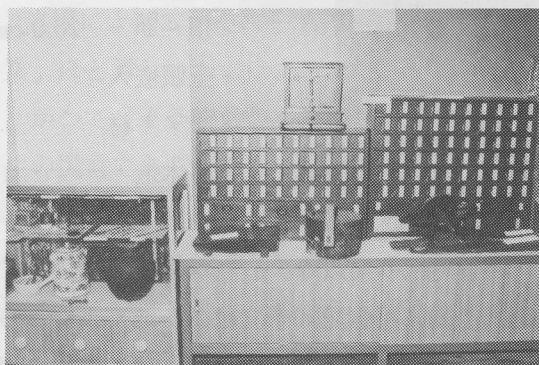
Ⅳ. 展示資料紹介コーナー

「百聞は一見に如かず」といわれる。このコーナーを通して、「もう一度見てみたい。貴重な資料だ、ぜひ見たい。」の気持ちになっていただければの思いで、順次掲載したい。

今回は、加茂市指文化財を2件取り上げた。

1. 漢方薬製薬器具一式（昭和50年1月12日、加茂市文化財に指定）

江戸時代から明治時代初期に製作・使用されたもので、製薬・調剤用具の大部分がそろっている。主なる製薬用具は、やげん（薬の原料をすりつぶすもの）、両手・片手切り（薬草を細断するもの）など。調剤用具は、乳鉢、乳棒、ふるい、丸薬皿、薬天秤などである。収納用具として、薬壺と百味たんす（漢方薬を分類して入れておくもの）などがある。

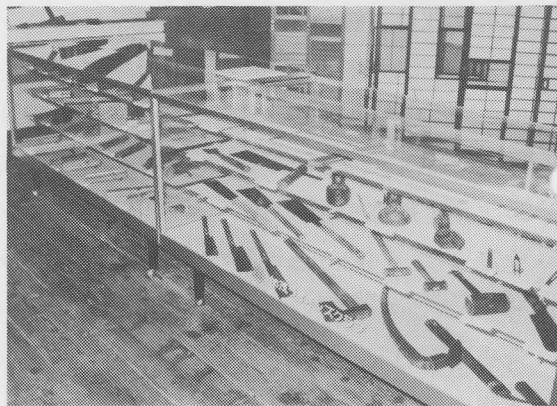


長岡の温泉調査者 小林英庵の「越後薬泉」の記録の中に、加茂が漢方薬剤の一大集散地として、享保の頃（1710年）約40人が薬種取りを許されて、百余種の漢方薬の原材料を作っていたことが記されている。当時からの道具が多く含まれているものと思われる。

2. 手加工時代の建具製造工具（昭和53年12月12日、加茂市文化財に指定）

明治、大正、昭和初期の工具で、種類14点、名称別68点、総数130点である。主なる工具の種類は、鉋類、鋸類、のみ類、錐類、しゃくり類（ガラスや板をはめるみぞとり用具）、けびき類（すじ引き用具）、かね尺類、槌類、型類、墨つぼ類、接着剤用具などである。

指し物の町として、量産化したのはいつ頃かは判然としないが、江戸時代後期には相当の量が生産されていた。元治元年（1864年）に発行された、「越後土産・初編産物見立取組」（相撲の取組表に似せて作ったもの）には、加茂の戸障子が前頭の部に入っている。



〈編集後記〉

平成6年の加茂市10大ニュース（市政モニターの選定）に、「民俗資料館の移転」が第6位に入っている。本館に寄せる市民の関心と期待の大きさをうかがうことができる。

文化財調査審議会委員長 古川信三氏より「創業の難」と題する玉稿を賜りました。心より厚くお礼申しあげます。移転開館を機に、改ためて創業の本旨をかみ締め、当時のご苦勞に思いを馳せ、本館の益々の充実発展を期したいものである。今後とも皆様方のご支援・ご協力をお願いします。